

# 宿縁

五月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号  
浄土真宗 本願寺派 中原寺  
TEL 0477-372102  
FAX 0477-372102

## さしむけられた

## 真実に出会う



五月に「こどもの日(5日)」と「母の日(第2日曜日)」があるのはたまたまだとは思いますが、何処の国でも母と子のつながりの深いことは共通するものがあります。

『何かにつけて“ママ、ママ”と呼ぶお母さんがすべてだと感じる幼いときは、それほど長くはありません。気持ちに距離が生まれる青年期があり、最後は看取りの時も来ます。

世に季節があるように、親との関わり方も移り変わります。母の日のきょう「あり

がとう」と言いたいお母さんは、近くにおられるだろうか。』(5/9朝日新聞 天声人語)より。

折しも、高1の女子高生が母親を絞殺した容疑で逮捕されたというニュースが報じられています。近頃はやたらと尊属殺人があつて心を暗くします。

以前に、日頃お念仏をよろこぶお姑さんはテレビで暗い殺人事件が報道されると、決まってお仏壇の前に行つてお念仏申していたというのを聞いたことがあります。

きっとすべてのものを救いとする仏さまのお慈悲の大きさを思うにつけ、また人間の深い業の闇を悲しまずにいられなかったからではないでしょうか。

釈尊が説かれた經典のうち浄土三部經の一つ『仏説観無量壽經』は釈尊在世の当時、インドの大国マガダの王舎城におこつた親殺し事件を背景に、仏の救いの対象は一生造悪の凡夫ゆえに南無阿彌陀仏の功德回向のはたらきによつて救われてゆく道筋が説かれたものです。

アジャセという王子は悪友のダイバダッタにそそのかされて父王を牢獄に幽閉し、餓死させようとします。その王のために密かに食物を運んだ母の王妃イダイケをも殺害しようとしています。わが親をも殺そうとするこのいまわしい娑婆世界に狂乱したイダイケは、苦しみのない世界に生まれ変わりたいと願ひ、浄土を觀る方法を教えてくれるように釈尊にお願ひします。この王舎城の悲劇の場面が序文に描かれています。

釈尊はこのお経の中で、乱心した息子のために夫を殺され自らも牢獄に幽閉されたイダイケという女性に対して、

あきらかに聴け、あきらかに聴け、よくこれを思念せよ。私はこれから汝のために、苦惱を除く法をくわしく説きあかそう。汝らは心にとどめて広く大衆のためにくわしく説きあかすがよい。

と語っています。しかし注意したいのは、苦惱を除くということ、決して人生上のさまざまな苦惱に対して、その一々をその場で処理するというものではありません。あらゆる苦惱の生起する根本原因を明らかにし、そこから脱出する道を成就するということです。

すなわち、私たちはごく常識的に、「我が家」という誤つた認識が、「我がもの」(私物化)という思いを引き出し、「我が体」、「わが心」、「我が家」、「我が子」…等々。こうして私たちは自分のまわりに「我がもの」を寄せ集め、それを囲いこんで垣根をつくり、自分の世界に執られて人生を費やして止むことがありません。

この世に存在するものは、他のものと相互に依存することによって成り立っている。私が生まれようと生まれまいと、このことは「法」として定まり、「法」として確立している。私はこれをさとり、これを知った。これをさとり、これを知って、教え示し、詳しく説き、明らかにし、

かにし、「汝ら、見よ」というのである。(『雜阿含經』)

釈尊はこうした真実の法に対する無知こそがあらゆる人生の憂い、悲しみ。苦しみ、悩みを生み出す根源であることを見極めました。

しかし親鸞聖人が『観無量壽經』の序文に語られている「王舎城の悲劇」を大事にいただいたのは、「真実の法」とは、私たちの自身の現実の中に活動するはたらきとなつて現れ出なければ、それは一つの思想であり、哲学ではあつても宗教ではないとされたことです。だから、苦惱するイダイケが釈尊に出会い、その姿に接し、イダイケの心が悲劇の中でどのように移り変わつてゆくかというプロセスに深い意味を見出されました。

人間世界の生々しい現実がなければ、法(真実)に出会うことはできません。人が法を本当に聞く身になるのは、人生のゆきづまりとか病氣や災難、人生の悩み・苦しみに出会つたときです。そういう縁にめぐり会つたときでないと、なかなか法に接することは難しいと思います。そういう意味から、『観無量壽經』は、仏の教えがどういう人にも、どういうときに受けとられるかを明らかにしているお経なのです。

おのが目で月を見るとは思うなよ  
月の光で月を見るなり

この歌のように「法(真実)に目覚める」というのは、「その法」が未だ真実を知らないものに向かつて、常に目覚めをよびますはたらきとなり、その真実がみずから動いて届くからこそ、私の身に「目覚め」が起こるのです。これを先手の救いというのです。